

# 01. 国主淵と龍

これは和歌山県の貴志川町を流れる貴志川にまつわる話。

むかし、長い日照りが続いたことがあったそう。

畑や田んぼがひび割れて、稲は枯れかかっていたと。

「このままでは年貢を納めるどころか、食うものにもこと欠いて、村は全滅じゃ」

「井戸を掘ってもみたが、このあたりは塩っ気があって使いものにならん」

「たのみの貴志川も、とっくにそこを見せとるし」

「どっかに水はないものか」

水は国主淵に溜まったものだけになり、それも日毎に少なくなっていくたそう。

そんなあるとき、村の古老が、

「そういえば、わしが子供のころ年寄りに聞いた話じゃが、何でも、国主淵の底に龍宮へ続いている穴があって、大昔に理由あって穴をふさいだそう。嘘か本当かあ判らんが、その穴をふさいどるものを取り除ければ、水はなんぼでも湧き出てくるんじゃないか」というた。

そこで、ある強い侍が淵の底に潜って確かめることになったそう。

侍が“国次”という名刀を口にくわえて潜ってみると、言い伝え通りにそこに洞穴があって、その前に太い松の木みたいのが横たわってあった。

侍は、それを押したり引いたりしたがびくともせん。そこで、刀を逆手に持って力まかせに突き立ててみた。すると、太い松の木みたいのが、ズルズルと動き出したと。

松の木に見えたのは、実は、大きな龍だったと。

龍は、燃えるような眼をカッと見開き、侍に襲いかかってきた。

侍は必死に刀を振りまわした。刀が龍に当たるたびにカチッと音がして、ウロコが飛び散ったと。

戦って戦って、数え切れないほどのウロコを切り落とされた龍は、弱って、淵の底に沈んでいったと。

侍が水面に浮かびあがったら、なんと、龍の面が数えきれないほど漂っていて、それらが水を切って走り、噛みついてきた。

「化けものめ、まだ残っていたか」

侍は右手で刀を立てて斬り割り、左手で生き面をつかむと、サッと

岸に投げた。すると不思議なことに、斬られた面はその場で龍のウロコに変わり、岸に投げられた面は魔力を失って、みるみるうちに干からびたと。

侍が最後の面を斬り割り、岸辺に泳ぎ着いてホーッと息を吐いたときだった。

淵の中ほどで渦が巻きはじめて、それが段々に大きくなっていった。すると、空でも、にわかには湧いた黒雲が渦を巻きはじめ、それが段々に大きくなって、あたりが妙な具合に薄暗くなった。稲光がして、ゴロゴロ鳴りだしたら、たちまちどしゃ降りになった。雷がひときわ大きく鳴ったとき、渦の中から龍が跳び出て、空に渦巻く黒雲の中へ駆け昇っていったと。

村人たちは肝っ玉飛ばして、尻餅をついたり、這いつくばったりしておったが、やがて久しぶりの雨に大喜びしたと。

そのとき以来、貴志川の水がどんなに涸れても、この国主淵だけは底を見せたことがないそうなのさ。

## 02. 笠地藏

昔、あるところに貧乏な夫婦があったと。

大晦日が来たけれども、晩の年越の仕度も出来ないので、女房が、「いままでたんせいしてうんだ芋糰玉を売って年越仕度をしてはどうでしょう」

というた。夫は芋糰玉を持って町へ出かけたと。

「芋かせや、芋かせや、芋かせはいらんか」とふれながら町中を行ったり来たりした。が、だれひとり見向く者がなかったと。

暮れ方になって、もう帰ろう、と歩いていたら、向うから笠売りの爺さまが、

「笠や、笠や、笠はいらんか」

と売り口上をいいながら、やって来た。

「芋かせや、芋かせや」

「笠や、笠や」

二人は売り口上をいいながら、行きずりに互いの顔を見合ったと。

笠売りの爺さまが立ち止まって、

「芋糰玉やさん、売れたかね」

「いえ、売れません。笠やの爺さまは、売れましたかね」

「いや、いや、わしも一向に売れん」

と、疲れた顔でいうたと。夫は、

「これ以上歩きまわっても仕方ないので、このあたりで帰ろうと思うていたところです」

というたら、爺さまは、

そうじゃのう。お若いの、お前はどこのご仁か知らぬが、今夜その売れない芋かせ玉を家に持ち帰ってもはじまるまい。どうじゃろ、わしのこの笠ととりかえっこすまいか。実のところ、わしも、売れない笠を今夜家に持ち返りたくないのじゃが」

というた。

それもそうだ、と思った夫は、芋かせと爺さまの笠とを取り替えた

と。その笠を持って、とぼりとぼり戻っていたら雪が降ってきた。雪はだんだん強く降って、とうとう吹雪になった。

野中の裸地藏のところまで来たら、吹雪が、地から舞い上がるようにうなり吹いた。

「この寒さに、雪の中に裸で立っていたら地藏さまもさぞや寒かろ

う」

というて、夫は取り替えた笠を地蔵さまの頭にかぶせてやった。そして空手で家に帰ったと。

女房に、

「苧枷玉はとうとう売れなんだ。それで笠売り爺さまの笠と取り替えっこをしたが、帰り道で、野中の裸地蔵さまがあんまり寒げだったから、頭にかぶせて来た」

というた。そしたら女房は、

「笠を持って来ても、今夜の年越の足しにはならなかったのだから、せめてお地蔵さまにおあげして、よかったあ」

というて、夫をなぐさめたと。

夫婦は年越のごちそうが作れなかったのでカユをすすって、早くに寝たと。

真夜中に何かの音で夫婦は目が覚めた。

耳をすますと、外はひどい吹雪の音がして、その吹雪の絶え間絶え間から、ヨンサ、ヨンサと、物をかついでくる音が聞えてきた。だんだんその音が近づいて、どうやらこの家の方へ来る様子だ。

「はて、誰だろう、変だなあ」

と二人が思案顔を見合わせていたら、

「暮れ方のことはありがたかった」

と大きな声がして、誰かが戸口のところに、どさりと、なにか重い物を置くような音がした

夫婦が起きてみると、戸口に大きな袋が置いてあった。そして、吹雪の中を、大きな裸地蔵さまがのんこのんこと歩いて行くのが見えた。

二人が袋を開けて見ると、なかには大判小判がザンザラリンと詰まってあったと。

いんつこ もんつこ さかえた。

### 03. 親孝行な娘

むかし、あるところに貧乏なおっ母さんと娘とが暮らしておったと。

娘は未だ年端もいかない子供であったが、身体の弱いおっ母さんになりかわって、毎日人さんの所へ行って草取りしたり、手間取りしたりしては駄賃をもらい、薬を買ったり、食べ物を買って、その日その日を暮らしていたと。

そのけなげな親孝行ぶりが評判になって、お城にいる殿様の耳にも届いたと。

殿様は、

「今どき珍しい話だ。年若な娘らしいが、何ぞほうびをとらせてやりたい。誰ぞ行って確かめて来い」

と、家来に言うたそうな。

家来は早速その村へ行って、いろいろ訊いてまわったと。

そしたら、その評判は大したもの、誰も彼もが口々にその娘を誉める。

家来は我が事のように嬉しくなって、

「こりゃ、早ようその娘を見たいものだ」いうて、その母娘の住んでいる家に行ったと。

そして、障子の穴からソロツと中の様子をのぞいたら、調度、晩ご飯どきだった

よくよく見ると、母親は黒っぽい妙なご飯を食べているし、娘はというと白いご飯を食べている。

「はあて、見ると聞くとでは大違い。こりゃ、あべこべだ」  
と思うて、なおも見ていたら、娘はご飯を食いあげると食事の後かたづけもしないで、母親はまだ湯を飲んでいるのに、さっさと夜具の中に入ってコロツと寝てしもうた。

家来は、この娘は評判負けのする親不幸な子だな、けしからん。とおこりながらお城に戻ったと。

そして殿様に、

「とんでもない話でした。家の内と外では大違い。病人の母親には黒い妙なご飯を食わせ、自分じゃ、白いご飯を食べていました。おまけに、母親がまだ食べあげないうちに、夜具の中へ入ってゴロツと寝て、起きて来なかったです」

と申し上げた。

「そうか、それがまことなら評判とはあべこべの話だ。ほうびどころでない。そんな娘は罰しなければならぬの。明日にでも召し出せ」

いうたと。

次の日、娘はお城に召し出されて来た。

殿様直々に、

「お前は、母親に黒い、まずそうなものを食わせ、お前は白いご飯を食うていると言うが、それはどういうわけだ」

と訊いたと。そしたら、娘は、

「おら家は貧乏だすけ、米の飯は食べらんねえ。病気のおっ母あが少しでも力がつくように、おっ母あには粟の入ったご飯を食ってもらって、おらは、豆腐のオカラを分けてもらって来て食べているがんです」

と答えた。

「それじゃあ、母親がまだご膳が終えないうちに、お前は夜具の中へ入って寝ると言うが、それはどういうわけだ」

「はい、それは、おっ母あが寝るときに冷たいから、おらが早う入って寝ていれば、夜具が温まる。温もったどこへおっ母あが寝れば、夕さり寒いって言わんで寝られるいに。それで、おらが早よ食べて、ほして夜具を温めるがんだ」

「うーん、その黒いのは粟飯であったか。お前の食った白いのはオカラであったか。うーん、毎日そうしているのか」

「あい、とても米が買いきれねえすけに、そうしています」

「うーん、夜具も、お前があつたためて親を寝かすんだな」

「あい」

「うーん、けなげなことよのう、のう皆の者」

いうて、涙を流したと。

「よしよし、明日から、お前はオカラを食べないでいいようにしてやるぞ」

というて、ほうびをくれたと。

そのほうびで、母親と娘は一生米の飯を食って暮らせるようになったと。

これで息がひっさけた。